

ゆうりきんさい  
釉裏金彩

種 別	重要無形文化財
指定年月日	平成13年7月12日
保 持 者	よした みのり 吉田 美統

釉裏金彩は、陶磁器に金箔などを用いて文様を描き、上から釉薬をかけて焼く制作技法である。竹田有恒氏が1960年代に考案したものである。

吉田氏は、金襴手の技法を得意とする九谷焼の窯元・錦山窯<sup>きんざん</sup>に生まれた。高校在学中から陶芸技法を学び、昭和26（1951）年、19歳で窯を継いで3代目となり、九谷伝統の金襴手や上絵付けの技術を深めた。昭和47年、加藤土師萌<sup>はしめ</sup>氏の作品に出会ったことをきっかけに釉裏金彩の技法による制作を始める。

吉田氏は道具選びや金箔の厚さなど試行錯誤を重ねながら、釉裏金彩の技法に新たな表現を生み出していった。それまで金箔を貼った後に色釉をかけていたものを、透明感を表現するために透明釉を用いた。また厚さの異なる二種類の金箔を使い分けて立体感や濃淡を表現し、緑が中心だった地色も、黄や紫、青などと広げていった。

金箔と地色の絶妙な調和から陶芸の金彩の世界に新たな地平を開き、釉裏金彩を洗練した芸域にまで高めたとして高く評価されるものである。



吉田美統作「釉裏金彩 牡丹唐草瑞鳥文平鉢」